

## 九州体育・保健体育ネットワーク

### 台湾ラウンド報告書

平成30年3月14日(水)～16日(金)

## 福岡教育大学大学院

松永武人・橋本充弘・内山忠則・近藤彰信

昨年の韓国ラウンドに引き続き、九州体育・保健体育ネットワークの海外視察に参加させていただきました。福岡教育大学大学院の学生4名も先生方とともに、台北・台南の小・中学校を視察しました。学生の立場から、視察を通して感じたこと、考えたことを報告させていただきます。

### 桃園市北勢国民小学校

桃園市立北勢国民小学校は、全人発展・多元開放・專業創新を学校の中核とし、「真、善、美」の培養を図ることを学校の経営方針としている学校です。全生徒1005名、各学年170名程度であり、1クラスが27～28名で編成されていました。

この学校の特徴は、武術を中心に、生涯教育へと発展させる点にあります。地域の特性も活かしながら、幼稚園から段階的に、武術に重点を置いた指導がなされていました。武術の名前は“北勢武術”です。北勢武術を通して、①伝統を守りながら新しいアイデアの創造、②どのように健康の促進を生徒に導入するのか、③チームワークの考え方を身に付けることをねらいとしており、いつでもどこでも運動を楽しむことを学校側は大事にされていました。運動・スポーツの楽しさを感じさせたいという思いが非常に強く、生徒があくまでも自発的に運動に取り組み、運動を好きにさせることを学校側はねらいとしていました。その一つの手段として、北勢武術が果たしている役割は非常に大きいと感じました。

### 武術2年生の授業見学

授業は10分準備、20分メイン、10分総合（まとめ）という一連の流れを学校全体で共通させて取り組まれていました。今回は、第2学年の北勢武術の授業を見学させていただきました。1年生からの継続を図っており、目的は①基本的攻撃と守りの習慣、②運動量の確保、③スポーツによる美学を学ぶ、の3つで設定されていました。

学校には武術を専門とする教師が配置されており、本授業においても武術専門の教師が授業を実施していました。しかし、体育の専門でない教師も武術は絶対に指導する必要があり、研修などを通して武術指導について学んでいることがわかりました。

#### 準備

- ・ジョギング・関節域を広げる・ジャンプ（武術の基本的な動きの基盤）
- ・声を出す

#### メイン

- ・立ち方・両手の使い方・足の使い方
- ・両手、両足の使い方・音楽に合わせて両手、両足の使い方・動物の構え方

#### 総合活動

#### 北勢武術の披露



・班に分けて演じ合い・それぞれの良い点、悪い点の指導・生徒同士の教え合い・個別にポイントの修正

## 高雄市明德国民小学校

高雄市明德国民小学校は、海が近く、海軍団地が近くにあり観光スポットが多いところに立地しています。1957年に設立され、過去には24クラスもの学級が存在していたが、現在では6クラスしかありません。理由は、少子化の影響です。この学校の特徴として、競技性とダンスの要素を含んだ一輪車に力を入れています。過去には、70年代に野球、80年代に陸上、90年代にハンドボールを特色としていました。種目が変化してきていることには理由があり、少子化の影響でハンドボールを行うことが難しくなったこと、地域と連結して地域交流を図ろうとしたことからです。これらの理由のもとに、2013年から一輪車を特色として発展寄与してきました。

## 一輪車について

この学校では、子供の実態と資金との兼ね合いで一輪車に教育的価値を見出し、地域と連携して実施されています。1年～6年生で必修の教育内容として実施され、1年生は2週に1回、3年生からは週に1回行っています。一輪車を実施する上での目標は、誰でも乗ることができるようにすることです。非常勤講師の体育教師（1名）と外部講師の一輪車専門の教師が相談して授業内容を計画しています。さらに、各学年の評価方法は政府が示すものと照らし合わせており、評価規準に基づき、知識・態度・技能で評価しています。そして、一輪車をどのように普及させるのか模索しています。非常勤講師の体育教師は、一輪車のことを指導せずに台湾の教育委員会が示している体育授業を指導しています。一方、外部講師の一輪車専門の教師は学校体育を指導せず、一輪車指導のみを行っています。



## 台湾の教育界の状況

なぜこの学校では一輪車に特化して、子供に指導しているのか。その理由として、台湾の各学校では、子供の学力や将来像を見据え、それぞれの学校の特徴を生かした運動に取り組んでいくと、台湾の教育委員会から経済的に支援されることにあります。さらに運動会や大会などのイベントを開いてくれるといったこともあります。そういった背景がある中で、各学校は教育委員会にアピールすることが大切だとしており、地域に応じて縄跳びや獅子舞などを指導している学校もあります。また、台湾の小学校には、児童の状況に応じて必ず1名の体育専科の教員が配置されているといった現状もあります。

## 学校での取組の工夫

SH150 を達成するために、20 分間の休み時間を利用して簡単な運動を実施している。また、朝 7 時 50 分～8 時 30 分の間にジョギングも行っています。児童に合った指導をするために ICT を活用した授業を実施しています。

## 新北市万里国民中学校

創立 49 年を迎える新北市立万里国民中学校は、近隣の小学校 6 校から集まっており、生徒数 166 名（8 クラス）の中学校です。全校生徒のうち、約 52% は貧困家庭であると伺いました。

体育の授業は週 2 回行われており、私達が見学させていただいた授業は第 2 学年のバスケットボールの授業でした。本時は 6 時間授業があるうちの 3 時間目であり、授業内容はドリブルからのレイアップシュートでした。シュート動作に入る前では、ゴール前に立っている先生をドリブルでかわしてシュートするという授業内容でした。授業を受けていた生徒は第 1 学年の時にパス、ドリブルの授業を履修しており、第 2 学年ではシュート練習を取り入れた授業を習っていました。

万里国民中学校はボーイスカウトにも力をいれており、HR や学級活動の時間をボーイスカウトの時間に当てていました。ボーイスカウトの授業を通じて、コミュニケーションを取り合うことでチームワークを身につけたり、強化も図ったりすることを目的にしています。教室で話すことも重要ですが、身体を動かしてコミュニケーションを取り合うことも重要だと伺いました。

日本の体育授業とは異なり、単元計画というものが台湾にはないことがわかり、日本の教育との違いを視察を通して学ぶことができました。また、施設面においても十分な施設がない中で体育の授業を行っていたため、大変勉強になりました。



## 台湾における教育政策及び小中学校体育授業の現状視察から

本レポートは、台湾における教育政策、小・中学校の体育科・保健体育科授業の現状を視察して、専門教科ではない私を感じ取ったことを率直にまとめたものである。よって専門的な指導の在り方や授業構成などに関しては記述が乏しい箇所が多々あると思われるが、ご容赦願いたい。

視察した学校は桃園市北勢国民小学校、新北市万里国民中学校、高雄市明德国民小学校の 3 校である。視察した学校それぞれで、学校の抱える教育・健康面での課題や克服のための取り組みや成果をプレゼンテーション方式で発表して頂き体育科授業を 1 コマずつ視察した。以下、本レポートは 3 つの柱< I. 視察校共通の課題、II. 地方の学校に関して、III. 体育科授業を視察しての感想>に分けて執筆する。

### I. 視察校共通の課題

3 校の小・中学校を視察して、それぞれの学校において体育科・保健体育科に求める資質能力の育成に若干の差はあったものの共通した課題が 2 つあった。

1 つめは、子供達の運動離れの打開、解消である。台湾では急速な社会の変化等の事象により、子供達の運動離れが進んでおり、体力の低下が社会問題となっている。そこで台湾の教育部は、子供達の運動離れや体力低下を防ぐために、SH150 という教育政策を実施している。SH150 という政策を簡潔にいうと、子供達が一週

間に運動する時間を 150 分確保しようというものである。このように、国全体で子供達の運動離れ、体力低下を防ごうと尽力していた。特に 1 日目に視察した桃園市北勢国民小学校では 150 分を確保するために、中休み（15 分間の休み）には教員が運動場等で遊ぶように促していると聞き、現場の教員も一丸となって取り組んでいることが伺えた。しかし、実際には全生徒が 150 分という目標を達成しているとは言い切れないのが現実という校長の話や、プレゼンターの教務主任の「もっと運動を気軽に楽しめる学校環境を整えたい」という言葉から、学校として—今後どのように子ども達が運動に親しめる環境、授業を整えていくかという課題が挙がっていた。また、それぞれの学校ではカリキュラム・マネジメントを行い、運動時間の確保のために、総合的な学習の時間等も活用して楽しく、運動するといった取り組みが多く見られた。

2 つめは、コミュニケーション能力の育成である。視察した学校全てで「他者とのコミュニケーション」という言葉が度々発せられた。昨今、日本国内の小・中・高校生、大学生までもコミュニケーション能力の低さが指摘されており、台湾においても似たような現象が起きているのではないかと推察された。これらを克服する一環として、体育科・保健体育科の授業で養うものの一つとして他者とのコミュニケーションを図る種目やイベントを行っていた。

## II. 地方の学校に関して

桃園市北勢国民小学校のように台北市に近い学校は、学校施設も整備されており、教員数も比較的多いように感じた。都市部に近いこともあり、生徒数も多く活気ある学校のような印象を受けた。それゆえに SH150 を全生徒が達成することの難しさもあるようだが、ここでは都市部から離れた新北市万里国民中学校、高雄市明德國国民小学校 2 校の学校の現状を記述する。

まず新北市万里国民中学校は台湾北東部の漁師町に位置する公立中学校であり、全校生徒 166 名の小規模校である。地域の現状からいうと貧困家庭が多く、子供達の学力も高いとは言い難い。学校敷地内には職業訓練施設のような建物も造られており、高校進学以外の子供たちのために特別な技術能力を養うことも行っているようである。ここから推察できることは、地域に見合った教育を行おう、生徒の社会性を育てようとする学校の姿である。万里国民中学校では、社会性を育むことを意図してコミュニケーション能力を活用するための野外活動やイベント（自転車 100 km 挑戦）を企画し、他者との関わり方を養おうとしており、地元で根差した教育を行っていた。

次に、南部の高雄市明德國国民小学校は保護者や OB、地域住民の協力が非常に大きい学校だと感じた。以前は海軍基地が学校に隣接しており、1000 人以上が在籍した学校であったが、現在は 100 人ほどに減少しており、現在の広大な敷地と校舎がどこか人寂しさを醸し出していた。明德國国民小学校も桃園市北勢国民小学校に劣らぬ立派な陸上競技トラックや屋内体育施設が整備されていた。学校の特色として体育科授業では一輪車に力を入れており、6 年間練習して 3.5 km の町内を一周できることを目標にしている。保護者や学校 OB、地域の方が一緒になって学校運営をしているように見受けられ、コミュニティスクールのような印象も受けた。地域に開かれた学校運営をしているのだと見受けられた。

台湾の地方の学校は、地域の現状に見合った教育を施すことを主として、同時に国全体の政策である SH150 を達成しようと各学校で体育的な特色を出しながらカリキュラム・マネジメントや授業構成を行っていた。そして、体育的活動のなかから体力や運動技能だけでなく、様々な新たな知を子ども達が得られるように工夫をしていた。一方で佐藤豊教授も述べられていたように「活動あって学び無し」といったスパイラルに陥らないかという指摘には私も共感した。各学校で特色ある活動を軸にカリキュラムを編成するのは大切なことだと考えるが、あまりに極端な経験主義重視の教育活動では、活動に取り組む意欲の差や目的意識のない活動では幼い子ども達は十分な知を得られないのではないかと推察される。社会科の教員を志す者としては、子ども達に経験を通して多くの知を体得してもらいたい気持ちもあるが、佐藤豊教授の指摘のように全体として得る知識力は低くなる傾向がある。ここは今後の取り組みを考えるうえで、各校の検討材料になると考える。

### III. 体育科・保健体育科授業を視察しての感想

桃園市北勢国民小学校の彭先生（体育科専門コーチ）の熊貓拳の授業を拝見して、伝統と格式高い武術を子ども達が親しみやすいように舞踊のような形で授業しており、斬新な授業だと感じた。一般的に武術と言えば厳しい練習や伝統を重んじる素人には近寄りがたいもののように感じるが、北勢国民小学校の子供たちは楽しそうに武術の授業に取り組んでいた。授業の構成として1単元6回で組まれており、リズムに合わせて武術の簡単な型を身につけていくスタイルの授業で、先ほども述べたが日本では運動会や体育祭の踊りの練習にどこか似たようなものを感じた。素人意見だが、やはり武術の型を通して行う際にBGMがあると、自らが意識する人物に成りきれるといった効果があったのではないだろうか。1コマ40分の授業で集中力が途切れた子ども達がほぼいかなかったのもそういった彭先生のBGM等の工夫の成果だと考える。聞くところによると指導者の彭先生は武術大会で優勝した経歴を持つ方のように、それを聞いて更に私は驚いた。武術家であればあるほど、武術に親しむ授業ではなく技術面等に力を入れるように感じたからである。彭先生の凄みはその競技としての武術と運動（スポーツ）としての武術を使い分けられている点だと感じた。実際、授業後に武術選抜メンバーの演武を拝見したがこちらは技の難易度もさることながら、彭先生の意気込みも違って見えた。競技としての武術、運動としての武術その両方を拝見できた。

新北市万里国民中学校は前述のとおり他者とのコミュニケーション能力を育む野外活動やイベントを学校の特色としていた。私見だが、体育と言うよりも体育的な活動と言えるのではないだろうか。特段にイベントに向けての技術面での授業もなく、体力づくりの授業が設定されているのみでどこか技術指導の要素が極端に少ないと感じた。経験から学ぶといった学校方針があるようだが、体育の授業であるならば、適切に種目を取り上げ、技術指導や思考させる場面があってもよいのではないかと感じた。しかし、運動に意欲的でない子供たちにとっては、仲間と一緒に活動する良いきっかけになっているのかもしれない。学校内に設置されている活動用具を見て私は興味を惹かれた。仲間と一緒に高い壁を越えるものやバランスを保つものなどが設置されており、興味を惹くような活動が多いのは事実だと考える。

高雄市明德国民小学校では前述のように一輪車を学校の特色としており、子供たちは入学してから6年間で一輪車に乗れるようになることを目標としている。野外での授業も学校施設から見ても可能であろうが、明德国民小学校では主に体育館を使用していた。手すりや技術指導の看板等も設置されており、いつでも—だれでも練習できる環境が整えられていた。授業では仲間と協力して一輪車に乗れるようになるための先生の工夫もあり、仲間と一緒にという雰囲気を感じた。

3校の授業を視察して感じたことは、仲間と一緒に活動するという教育方針は共通しているということ。運動に慣れ親しみ生涯を通じて運動を続けようとする心を育てようとしていたこと。この2点が非常に大きいと感じた。また体育・体育的な活動を学校の柱として取り組んでいる姿を拝見し、私自身も運動、スポーツというものの見方を変化させねばならないと強く感じた。

### おわりに

台湾の教育の特徴として、地域の特性を学校に活かす点が挙げられます。それぞれの学校において中核となる種目、例えば本報告で挙げた北勢武術のようなものがあり、そうした中核的なものを通して学校の発展を目指すところが見受けられました。ただ、目の前の生徒の成長のために取り組むという教育の根本はどこに行っても変わりません。その根本を自分自身がどう突き詰めていくのか、現場に活かしていきます。そして私達のような若い教員が現場に立ち、日本の学校体育を少しでも発展させていけたらと感じました。これからも、自分の力に満足せずに日々成長する気持ちで勉強していきます。